九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

夢と人格特性との関連についての一研究

児玉, 恵美
九州大学大学院人間環境学研究科（修士課程）

https://doi.org/10.15017/837

出版情報：九州大学心理学研究. 1, pp.147-155, 2000-03-10. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

九州大学心理学研究，2000，第1巻，147-155
Psyc. Res. Kyushu Univ. 2000, Vol. 1, 147-155

夢と人格特性との関連についての一研究

児　玉　恵　美

A STUDY OF CORRELATION BETWEEN DREAMING AND PERSONALITY

EMI KODAMA

In this paper, attention was given to study the "Attitude Toward Dreams (ATD)", which has been ignored in many researches about dream. One of the example of ATD is how much individual is interested in dream and influenced by them. We tried to study the continuity dream and awakening from a new view point, by examining the inter-correlation among dreaming, ATD, gender and YG Personality Inventory. The method of questionnaire was used. A total of 420 university students were recruited as the subjects for this study. The result suggested that : (1) Female subjects had as many Dream Recall Frequency (DRF) as male subjects, and their dream were more vivid. (2) The subjects were tended to be more depressive and regressive were more positive on ATD and have more DRF, so it was inferred that those subjects were easily involved in dream.

Keywords: dreaming, dream recall frequency, attitude toward dreams, YG Pesonality Inventory

本研究では，多くの夢研究においてこれまで看過されてきた，どのくらい夢に関心を持ち夢から影響を受けるかなど，主体の「夢に対する態度」を特に取り上げている。夢み，夢への態度と，性別，YG性格検査との関連を見ることにより，夢と覚醒時との連続性を今までとは異なった視点で検討することを試みた。大学生420人を被験者として質問紙調査を行った結果，(1)男女とも同頻度の夢を見るが，女性の方が夢の記憶が明瞭であること，(2)抑うつ的で回帰性傾向の高い人は，より夢への態度が積極的で夢想起頻度も高く，夢に巻き込まれやすい人たちであると言えるだろうということなどが推測された。

キーワード：夢見，夢想起頻度，夢への態度，YG性格検査

Ⅰ．問題と目的

1．夢研究の背景

「夢は無意識への王道である」(1915) の言葉に示されるように，Freud, S. は，夢が無意識を理解するための重要な資材になると提示し，加えて「精神分析学は夢理論とともに一精神療法から深層心理学への一歩を踏み出したのである」とも述べている (1933)。それ以後，夢は臨床場面においてその意味を探り明らかにすることで患者の心の深層を理解するために利用されるようになった。現在ではさらに発展し，夢を体験するという現象そのものを解明するまでに至っている。心理学の領域では大別すると，夢

内容，夢想起，夢と覚醒時の連続性などについて主に研究されていると言えるだろう。

ここでまず鑪（1971）に従い，この論文で使用する用語について明確にしておきたい。「夢」という用語を使用する場合，「報告された夢」を意味し，一般に使用されている意味に近い。これは，Freud, S. の言う「顕在夢」である。「夢み」はDreamingの訳語として使用し，夢の体験そのものの生理心理学的側面を表現することとする。

2．夢想起頻度について

1953年，Aserinsky, E. & Kleitman, N. によるREM（Rapid Eye Movement）の発見により，夢みに関する研究が飛躍的に進むようになった。現在，夢みに大きく関わるとされているREM期が1夜の睡眠のうちで占める時間的比率は皆ほぼ同程度の約20～25%（1.5～2時間）であると言われているにも関わらず，眠っている間の体験にまつわる想起は，個人内で，あるいは個人間でかなり異なっている。Schredl（1996）は夢想起頻度（Dream Recall Frequency）に影響する要因は大きく次の2つに分けられると述べている。1つは状態（State）要因で，睡眠時間や夜間の目覚め，夢から注意をそらされるような朝の出来事，情動的ストレスの有無などを指すものであり，もう1つは特性（Trait）要因で，内向性，不安傾向，場独立性，認知能力といった，個々人の人格のある側面による要因を言うものである。

これまでに夢想起に関する多くの研究が行われてきているが，未だに知見が一致していなかったり，実証的な証拠が不十分であるものも含まれている。たとえば男女を比較した場合，女性の方が多く夢を想起する（e.g. Pagel & Vann, 1992; Schredl, 1996）という結果がある一方，鑪・平野（1985）は，男性の方に多夢想起者が多く，女性は夢の記憶が有意に明瞭であるとしている。人格特性との関連を調べた研究では，想像的思考性（Fitch & Armitage, 1989），白昼夢頻度（Singer & Schonbar, 1961），創造性（e.g. Schechter, Schmeidler & Staal, 1965; Schredl, 1995b）などとの関連が見られた。さらにMMPIを使ったものではHartman, Elkin & Garg（1991）が精神分裂病尺度の得点とのみ関連を見ている。

3．夢への態度について

夢想起頻度と密接な関係にあると言われているものに夢に対する態度がある。両者に相関が見られなかったものもあるが（Stickel & Hall, 1963），多くは夢を見ることが好きで，他の人と夢についてよく語ったり夢日記をつけたりする人はそうでない人に比べ，より多く夢を想起するとの見方で一致している（Cernovsky, 1984; Robbins & Tanck, 1988; Schredl, 1996）。これまで男性よりも女性の方が夢に対する態度が積極的で（Domino,1982; Robbins & Tanck,1988; Schredl 1996），夢から影響を受けやすく（Pagel & Vann, 1992）関心も高い（鑪・平野，1985）ことは言われてきたが，夢への態度と人格特性との関係が体系的に見られた研究は希少である。数少ない研究において，Schredl（1996）は16PFを用いて人格特性と夢想起頻度，夢への態度との関連を見たが，その中にはこれまでの知見を支持するものもあれば反対の結果を生むものもあった。また被験者も少なく，その結果は説得力に欠けるものであり十分とは言い難いであろう。

4．日本における夢研究の概略

さて，ここで日本における夢研究について述べると，臨床場面で語られた夢の事例や精神分析理論の中での夢の重要性などについて書かれた著書は数多くあるものの，その実証的研究となると案外少ない。その中で，夢の内容に関して少しずつ日本人の夢についての資料が集められている（河合，1975; 鑪，1978 など）。妙木（1997）によると，Freud, S. のモデルが基本的に顕在内容から潜在内容の方へ向かう手続きを生んだとするなら，逆の流れ，つまり潜在夢から顕在夢の意味を読み取っていく重要性が今日の夢分析において唱えられているようだ。この流れに添って，鑪・平野（1985, 1986）は日本人

の夢把握の一環として，夢の主題に関する調査を行っている。

このように，夢の内容について調査した研究はいくつか行われてきているが，夢とどのように向かい合い付き合っているのか，あるいはどのような人たちが夢に巻き込まれやすいのかなど，夢への態度，夢から受ける影響について調べた研究は，日本において未だほとんど見あたらない。夢の内容に関する研究は，確かに人の内的世界のあり方を知る意味では重要であろう。しかし，たとえ同じ夢内容であっても，それを見る主体のあり方次第で，夢から感じ取るものや，そこから受けるインパクトの強さも全く異なったものになるのではないだろうか。夢内容と覚醒時の活動が関連していることも多くの研究者によって指摘されているが，その両者の掛け橋となる夢の取り扱い方，すなわち夢への態度の重要性はこれまで兎角見逃されてきた点であるように思われる。

5．本研究の目的

以上のことなどから，本研究では人格特性，夢想起頻度と夢への態度の相互の関係について基礎的知見を得ることを目的とする。その際より一般の人々を対象とするため，人格特性にはYG性格検査を用い，その中でもこれまで数々の夢研究においてはっきりした結果を見ない熟慮（内省）性因子，情緒安定性因子を取り上げる。

Ⅱ．方法

被験者　福岡県内の大学生・短大生・専門学校生の男女440名のうち，記入もれのあるものを除いた男性201名（平均年齢21.0歳）女性220名（平均年齢20.0歳）の合わせて計421名を分析対象とした。

調査内容　「夢に関する調査」と題して調査用紙を作成し，質問紙法で行った。大きく分けて次の3部から成る。(1)性格特性：YG性格検査に含まれる12の性格特性のうち，情緒安定・不安定性因子（抑うつ性，回帰性，劣等感，神経質），熟慮性因子(のんきでない，思考的内向性）に属する6性格特性を取り上げる。(2)夢み：①夢想起頻度を「夢をどの程度見ますか」に「月に1回未満」から「ほとんど毎日」の5件法で，②夢記憶明瞭性は「見た夢をどのくらい覚えていますか」に「見たかどうか覚えていない」から「ほぼ全部思い出せる」の5件法で尋ねる。(3)夢への態度：Cernovsky「Attitude Toward Dreams Scale」(1984) 17項目，Dmino「Questionnaire about Dreams」(1982) 30項目，Pagel & Vann「Reported Dream Use」(1992) 11項目，さらに予備調査で自由記述してもらった「あなたにとって夢とは何ですか」の回答の中から夢への態度に関するものを拾い上げた12項目により，緩和項目3つを含む25項目の尺度を作成した。これらは「あてはまらない」から「あてはまる」までの4件法で得点化された。

Ⅲ．結果と考察

1．「夢への態度尺度」因子分析

作成した「夢への態度尺度」25項目のうち緩和項目を除く22項目により，因子分析の主因子法を行った。その際バリマックス回転を施した後，因子負荷量が.35以下の4項目を省いたもので再度回転させ，最終的に18項目から3因子が抽出された。全体の累積分散寄与率は48.8%，固有値は1.5以上であった。それぞれの因子項目の内容から，第1因子を「夢の意義と有効利用」，第2因子を「夢の価値」，第3因子を「夢から受ける影響」と命名した。その後，各々の因子の信頼係数αを検討したところ，第1因子$\alpha=.75$，第2因子$\alpha=.78$，第3因子$\alpha=.76$，18項目全体$\alpha=.86$と十分高い値が得られた（表1参照）。これより以降「夢の意義と有効利用」は6項目18点満点，「夢の価値」は7項目21点満点，「夢から受ける影響」は5項目15点満点として扱うことにする。

2．夢み，夢への態度について性差の検討

まず男女別に夢想起の頻度を比較したところ，両者ともに「週に1・2回」夢を見ると答えた人が最も多く，これは鑪・平野（1985）の結果と一致するものであった。男女の比較では

表1 「夢への態度尺度」因子分析の結果

全体α＝.860	F1	F2	F3
第1因子：夢の意義と有効利用 （α＝.754）			
(13) 夢で自分を知ることができると思う	.701	.234	.126
(24) 夢は私達の潜在意識をあらわすと思う	.601	.189	.121
(20) 夢を理解することにより、その人の生活をより良くすることができると思う	.559	.106	.266
(07) 夢はその時の自分の気持ちや心理を映し出すものだと思う	.530	.181	.094
(02) 夢はその人の性格をあらわすと思う	.468	.242	.181
(05) 夢は詩や絵画など芸術作品を創るときに役立つと思う	.387	.137	.193
第2因子：夢の価値 （α＝.785）			
(14) 夢を見ることが好きだ	.123	.681	.048
(03) 夢にあまり関心がない（＊）	-.179	.625	-.131
(01) 夢を思い出そうと努力することがある	.084	.581	.254
(12) 夢はとても大切なものだと思う	.233	.552	.134
(10) 自分の見た夢をもっとよく理解したい	.277	.508	.165
(16) 夢には意味がないと思う（＊）	-.400	.406	-.008
(09) 自分にとっては日常生活が全てであり夢は必要ない（＊）	-.291	.379	.009
第3因子：夢から受ける影響 （α＝.760）			
(15) 夢がある人と接するときの態度に影響を及ぼすことがある	.136	.082	.661
(04) 見た夢が仕事や勉強に影響する	.195	.060	.599
(18) 見た夢によって気分が左右される	.042	.208	.592
(22) 夢が自己評価に影響することがある	.410	.008	.549
(25) 見た夢について考え込んでしまうことがある	.168	.396	.524
累積寄与率	30.2	40.3	48.8

(注)（＊）は逆転項目

表2 夢への態度3因子における男女の平均得点

	夢の意義と有効利用	夢の価値	夢から受ける影響
男性	10.41 (3.85)	14.12 (4.44)	5.27 (3.54)
女性	10.82 (3.63)	16.09 (3.57) ***	6.19 (3.26) **

** $p<.01$, *** $p<.001$ ( ) 内はSD

有意な差は見られなかった（図1参照）。次に，夢記憶の明瞭性について最も多い答えは，男性では見た夢を「思い出せないことが多い」(43.8%)であったのに対し，女性では「半分くらい思い出せる」という答えであった (44.1%)。t検定の結果，女性の方が有意に夢記憶が明瞭であることがわかり ($t=-3.13$, $df=419$, $p<.01$) これまでの知見を支持した（図2参照）。

以上などから，同じ頻度で夢を見ているのにもかかわらず女性の方が見た夢をよく覚えていることが分かる。これは，Wesserman & Ballif (1984)が指摘しているように，男女とも時に自

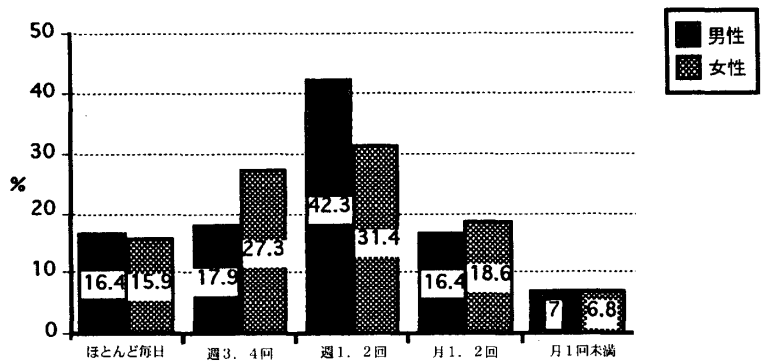

図1　性別による夢想起頻度の違い

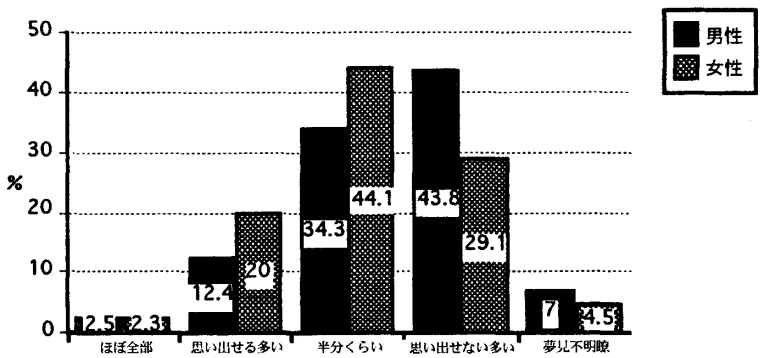

図2　性別による夢記憶明瞭性の違い

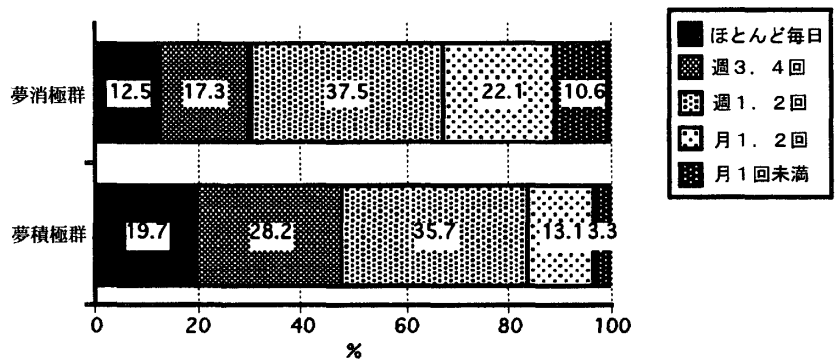

図3　夢への態度による夢想起頻度の違い

分の夢から情緒的な影響を受けることもあるが，より多くの男性が夢を抑圧するのに対し，より多くの女性がそれを思い出す傾向にあるということを表しているのかもしれない。

夢への態度の3因子「夢の意義と有効利用」，「夢の価値」，「夢から受ける影響」との間でt検定を行ない男女で比較した結果，男女の平均値の差は「夢の価値」($t=-4.98$, $df=419$, $p<.001$)「夢から受ける影響」($t=-2.77$, $df=419$, $p<.01$) において有意であり，得点は女性の方が高かった（表2参照）。女性の方が夢に対する態度が積極的で夢から影響を受けやすく，関心も高いというこれまでの知見を支持するものになった。夢想起頻度と夢記憶の明瞭性について考察されたことが，ここにも当てはまるかも知れない。

3．夢想起頻度と夢への態度に関する検討

因子分析し18項目に削られた「夢への態度尺度」全体の総合得点を54点満点で算出し，得点の高い方から約半数を高得点群（H群），残りの半数を低得点群（L群）として，この2群により夢想起頻度がどのように異なるのかを見た（図3参照）。カイ2乗検定の結果（$\chi^2=19.75$, df＝1，$p<.01$），夢への態度が積極的であるもの程，夢を多く想起することがわかった。

4．性格特性による検討

まずYG6性格特性，各々10項目ずつの合計得点を算出し，YG性格検査の標準点5分割を参考に得点の上位31％まで含むものを高得点群（H群），同様に下位31％まで含むものを低得点群（L群）と設定した。これ以降，この2群間での差について検討していく。なおYGの因子はもともと全体のプロフィールを見ながら扱うものであるため，本研究においても分析・考察する際には，因子ごとではなく6つの性格特性ごとに検討していくことにした。

各性格特性H·L2群間での，性差，性格特性と夢み，夢への態度との分散分析を行なったが，性差×性格特性の交互作用は見られなかった。また性差に有意差が現れた場合も，これまでに行った全体をまとめて性差で検討したものとほぼ同様の結果が見られたため，以下では行った分散分析の，性格特性による要因に限って言及していく。

（1）夢想起頻度：6特性のH群とL群をクラスカル・ライアン検定（H検定）を用いて比較した結果，『抑うつ性』（$\chi^2=11.97$, df＝2，$p<.01$），『回帰性傾向』（$\chi^2=10.27$, df＝2，$p<.01$）においてのみH群の方が有意に得点が高かった。

（2）夢記憶明瞭性：6性格特性全てにおいてH·L2群に有意差は見られなかった。

（3）夢への態度3因子：結果を表3に示す。

①「夢の意義と有効利用」…『思考的外向』L群（$F_{(1,285)}=11.97$, $p<.001$），『抑うつ性』（$F_{(1,276)}=12.99$, $p<.001$），『回帰性傾向』（$F_{(1,277)}=12.46$, $p<.001$），『劣等感』（$F_{(1,287)}=8.68$, $p<.01$），『神経質』（$F_{(1,264)}=6.31$, $p<.05$）の各H群において有意に得点が高かった。『のんきさ』では2群の差は見られなかった。

②「夢の価値」…『のんきさ』H群（$F_{(1,297)}=8.57$, $p<.01$），『思考的外向』L群（$F_{(1,285)}=$

表3　各性格特性H群・L群による夢への態度平均得点

		のんきさ	思考的外向	抑うつ性	回帰性傾向	劣等感	神経質
夢の意義と有効利用	H	10.90 (3.66)	9.91 (3.64)	11.42*** (3.55)	11.43*** (3.53)	11.46** (3.47)	11.34* (3.80)
	L	10.58 (3.90)	11.38*** (3.69)	9.80 (3.90)	9.86 (3.76)	10.14 (4.10)	10.20 (3.85)
夢の価値	H	15.95** (3.92)	14.58 (3.99)	15.88*** (3.92)	15.84*** (3.81)	15.60* (3.79)	15.42 (3.84)
	L	14.51 (4.40)	15.55** (4.17)	14.22 (4.32)	14.14 (4.20)	14.60 (4.46)	14.87 (4.12)
夢から受ける影響	H	6.11+ (3.55)	4.88 (2.90)	6.76*** (3.64)	6.58*** (3.57)	6.85*** (3.28)	6.73*** (3.52)
	L	5.41 (3.21)	6.51*** (3.53)	4.54 (3.14)	4.81 (3.07)	4.84 (3.43)	4.73 (3.06)

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.001 ( ) 内はSD

7.87, p＜.01),『抑うつ性』($F_{(1,276)}$ ＝11.49, p＜.001),『回帰性傾向』($F_{(1,277)}$＝12.19, p＜.001),『劣等感』($F_{(1,287)}$＝4.076, p＜.05) の各H群において有意に得点が高かった。『神経質』では2群の差は見られなかった。

③「夢から受ける影響」…『のんきさ』($F_{(1,297)}$＝8.57, p＜.10) において有意にH群が高得点である傾向が見られ，さらに『思考的外向』L群($F_{(1,285)}$＝22.03, p＜.001),『抑うつ性』($F_{(1,276)}$＝29.11, p＜.001),『回帰性傾向』($F_{(1,277)}$＝19.48, p＜.001),『劣等感』($F_{(1,287)}$＝25.90, p＜.001),『神経質』($F_{(1,264)}$＝25.89, p＜.001) の各H群で有意に得点が高かった。

『思考的外向』傾向に関しては得点の低い方，つまり思考的に内向である人の方が夢への態度が積極的であった。度々深く考え込む人は，より彼らの内にある世界に焦点を当て，それを重要なものとして扱っているのだろうか。『のんきさ』では，H群の方で得点が高くなっており，YGにより同じ因子に括られている『思考的外向』と同様にL群で得点が高くなるだろうとする予想とは反対の結果を得た。YGで測られるのんきな人とは，様々なことに興味関心を持ち，いつも何か刺激を求めている人たちであるため，同様に夢に対しても高い関心を示し夢を味わうことができるが，夢は夢として割り切り，そこまでこだわらないと考えることができるかも知れない。

『劣等感』の強い人や『神経質』である人は，周りの環境や動きを敏感に察知し，また物事を過度に心配してしまうので，それだけ夢から受ける影響も大きくなっているのではないかと推測できる。

度々ゆううつになったり，感情が不安定であったりする『抑うつ性』と『回帰性傾向』の高い人ほど，多くの夢を見ているというのは大変興味深い結果である。彼らはまた，夢への態度の3因子においてもH群とL群との間に大きな差があり，より夢に巻き込まれる程度が高い人達であると言えそうである。ちょっとした出来事にも情緒が左右されやすく，夢から受けるインパクトがより大きいために，夢想起が高められるのかも知れない。

Ⅳ. 総合考察

本研究により，ある特性が夢に対する態度に影響を及ぼし，そのことが夢想起頻度にも関連することがあるということが示唆された。

夢を想起する頻度は，朝目覚めた時にその直前まで見ていた夢を意識するか否かにより，大きく左右されるであろう。夢に関心を抱いている人は，それだけ見た夢に意識を向けやすいのではないだろうか。夢想起の頻度が男女で同程度でありながら，その記憶は女性の方が明瞭であったのも，女性の方がより夢の価値を認め，夢から受ける影響も大きいことが関係しているのだろうと思われる。さらに本研究では，Schredl (1996) の，男女で夢への態度に関わる特性が異なるとする指摘とは異なり，夢見と夢への態度について性格特性と性差との交互作用は見られなかった。これにより，夢に対して，男女を隔てずある程度共通した特性が大きく関係しているのだと見ることが可能であろう。

特に，抑うつ的で気分が変わりやすい人達は，夢から大きな影響を受け，見た夢を多く想起するなど，より夢に巻き込まれやすい人達であると推測された。このことは，夢をよく想起する人は神経症的不安を抱いているというHartmann (1973) の知見にも通じるところがあるかも知れない。Schredl & Montasser (1997) は，夢想起頻度にかかわる要因は覚醒プロセスに影響していると述べ，例えば特性不安が高い人や情緒的に動揺している人は，夜中によく目覚めたり眠りが浅かったりするために夢想起が高められるとしている。また，今回調べられていない創造性が高く空想しやすい人などは，イメージや複雑な刺激をたやすく操作できるため，夢でのイメージを覚醒時に困難なく伝達できるのではないかとも報告している。

より夢に巻き込まれやすいと考えられる人達に夢を通してかかわることは，一見さらに彼らの夢と現実の世界との距離を近づけ過ぎることになりそうに思われる。しかしながら，彼らは夢の影響を強く受けるとともに夢の価値を認め

ており，また夢が彼らの抱えている問題を間接的に表しているものだとすると，鑢（1997）が神経症の人達への夢分析の有用性を説いているように，治療場面において，抱えている問題に対して正面から立ち向かうのではなく，夢という媒介物を使い，ワンクッションおいて取り組むことは大変有効であるのではないかと考察される。

最後に本研究の限界を述べて締めくくりたい。得られた結果から，夢みに対して『抑うつ性』，『回帰性傾向』以外の特性にさほど大きな違いが見られなかった。このことは，１つには用いたYG性格検査が尺度として適切であったかどうかという問題，もう１つには，その中でも今回取り扱った特性が６特性だけであったことなどが挙げられるだろう。また，作成した「夢への態度尺度」にもさらなる検討を行う必要がある。

今後は，夢想起頻度や夢への態度を，性格特性と同時に夢内容を考慮しながら，さらに多面的，総合的に見ていくことが必要であろう。そしてそのことにより，実際の臨床場面において，どのような人にどの程度夢を語ってもらうことが有効であるかを示唆するデータを提示できるのではないかと考える。

謝　辞

本論文をまとめるにあたり，多くの方々に御指導頂きました。特に北山修先生ありがとうございました。深く感謝しております。

引用・参考文献

Aserinsky, E. & Kleitman, N.(1953) Regulary occurring periods of eye motility and concomitant phenomena during sleep. *Science,* 118, 273-274.

Cernovsky, Z.Z.(1984) Dream Recall and Toward Dreams. *Perceptual and Motor Skills,* 58, 911-914.

Domino, G.(1982) Attitudes Towards Dreams, Sex Differences and Creativity. *Journal of Creative Behavior,* 16(2),112-122.

Fitch, T. & Armitage, R.(1989) Variations in cognitive style among high and low frequency dream recallers. *Personality and Individual Difference,* 10,869-875.

Freud, S.(1900) Die Traumdeutung. London-Ausgabe. ［高橋義孝(訳) 夢判断］.

Hartmann, E. L.(1973) The function of sleep. New Haven: Yale University Press. ［ハルトマン，E. L. 鳥居鎮夫(訳)1976 眠りの科学，紀伊國屋書店］.

Hartmann, E. L., Elkin, R. & Garg, M.(1991) Personality and dreaming: The dreams of people with very thick and very thin boundaries. *Dreaming:Journal of the Association for the Study of Dreams,* 1(4),311-324.

河合隼雄（1975）夢内容に関する数量的研究 日本心理学会第46回大会論文集，494.

宮城音弥（1972）夢　第二版，岩波新書.

妙木浩之編集（1997）夢の分析「現代のエスプリ」別冊，至文堂.

Pagel, J. F. and Vann, B. H.(1992) The Effects of Dreaming on Awake Behavior. *Dreaming: Journal of the Association for the Study of Dreams,* 2(4),229-237.

Robinns, P. R. and Tanck, R.H.(1988) Interest in Dreams and Dream Recall. *Perceptual and Motor Skills,* 66,291-294.

Schechter, N., Schmeidler, G. R. and Staal, M.(1965) Dream Reports and Creative Tendencies in Students of The Arts, Sciences, and Engineering. *Journal of Consulting Psychology,* 29,415-421.

Schredl, M.(1995b) Creativity and Dream Recall. *Journal of Creative Behavior,* 29,16-24.

Schredl, M., Nurnberg, C. and Weiler, S.(1996) Dream Recall, Attitude Toward Dreams, And Personality. *Personality & Individual Differences,* 20(5),613-618.

Singer, J. L. & Schonbar, R. A.(1961) *Journal of Consulting Psychology,* 25,1-6.

鑢幹八郎（1976）夢分析入門，創元社.

鑪幹八郎（1978）日本人の夢内容に関する研究 ── 青年期の夢内容 ── 日本心理学会第42回大会発表論文集，1172.

鑪幹八郎(1984)夢と精神分析　山中康裕編「夢と象徴の深層」日本人の深層分析５，有斐閣.

鑪幹八郎・平野潔（1985）夢の主題に関する調査研究 ── 性差・年齢差についての検討 ── 広島大学教育学部紀要　第１部，**33**, 149-158.

鑪幹八郎・平野潔(1986)夢の主題に関する調査研究（第２報） ── P. I. L. 得点との関連の検討 ── 広島大学教育学部紀要　第１部，**34**,193-203.

鑪幹八郎（1998）夢分析と心理療法，創元社.

Wasserman, I. & Ballif, B. L.(1984-5) Perceived interaction between the dream and the waking divisions conciousness. *Imagination, Cognition, and Personality,* **4**,3-13.

河合隼雄責任編集(1995)総特集「夢」　イマーゴ，臨時増刊号２(12)，青土社.

山中康裕編(1992)特別企画「夢」　こころの科学，41. 日本評論社.